
涼宮ハルヒの憂鬱...と言うか、これはもう俺の憂鬱で良いじゃねーか！

空耳

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの憂鬱…と言つか、これはもう俺の憂鬱で良いじゃないか！

【Nコード】

N8916C

【作者名】

空耳

【あらすじ】

キョン（あだ名）…彼は高校一年になった春、出会ってはいけな
い人と出会ってしまい、そこから色々なドタバタに巻き込まれてし
まう。

第1話「プロローグ」（前書き）

この小説は涼宮ハルヒの憂鬱を元に書いたものです。実際の作品と多少被ってしまう所や、少し文が可笑しなところもあると思いますが、どうぞよんでください。

第1話「プロローグ」

皆さんは宇宙人や未来人や超能力者などを信じているだろうか？
俺の周りにはその宇宙人や未来人や超能力者がいてしまうと云う、
学園物の設定にしてはかなり珍しい事が起きている。と言うかそんな設定は、世界広しと言えどもこの物語りしかないであろう。

「退屈ね〜」

愚痴をこぼしたコイツはこの物語の主人公である涼宮ハルヒ。（まあ俺も主人公なのだが…）コイツはSOS団なる訳の分からん物を設立した人物でもある。

ハルヒは色々と面倒事を俺に持ってくるのだが、こちらにも色々事情があり、こいつの提案をすべて吞まなくてはいけない事になっている。

「トランプでもしますか？」

と、愛らしい声でハルヒに提案をしているロリ顔で胸が大きいこの人が、自称未来人で俺の心の中の天使。朝比奈さんだ。

朝比奈さんは色々とハルヒにされるのだが、いつも我慢をしている、見た目とは裏腹に意外と芯の強いお方だ。

「良いですね〜やりましょうか。ちょうど暇を持て余していた所で
すし。」

で、コイツは古泉。自称超能力者の変人。以上。

「……」

それで、椅子に座って本を読んでいるこの子が長門。自称宇宙人なのだが、それ以外の詳細は明かさない、いつも無表情な不思議ちゃん。

これが俺の悩みの種の一つでもあるSOS団と言つ訳の分からん部
活の数少ない部員である。

第1話「プロローグ」（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。
これからも呼んでいただけると光栄です。

第2話「SOS団＋インザ・沖縄I」 （前書き）

待ちに待った夏休み。

有意義に過ごそうと考えていた俺なんかそっちのけでハルヒの暴走は止まる事を知らないのであった。

第2話「SOS団＋インザ・沖縄I」

夏休み。普通なら昼頃まで寝ていても支障の無い日なのだが俺は今日、8時に起きて出かける身支度をしている。

「…ねむい」

と、ぼやきながら俺は自転車を駅に向かって走らせていた。

駅に着くと、長門が一人で本を読んでいた。今日、何故俺がこんなにも早起きをしたかと言うと、ハルヒに緊急招集されたからだ。

「よう長門。早いんだな」

長門は目線を本から俺に変えると、すぐにまた本に目線を落として呟くように言ってきた。

「あなたも十分早いと思うけど。」

確かに長門の言うとおりで、俺は待ち合わせの20分前に到着していた。

理由は簡単だ。たとえ集合時間に間に合っても最後に来た者はおごらされるルールだからだ。

「おや、もうお二人は着ていたんですか」

古泉はいつもみたく爽やかな笑顔で登場した。相変わらずコイツとハルヒは何を考えてんだか分からない時がある。この笑顔も何か考えがあつて作っているかもしれないな。

それからハルヒが集合時間10前に到着し、結局最後は朝比奈さんになってしまった。

「皆さんお早いですね」

朝比奈さんは相も変わらず可愛らしい。私服姿はなお一層可愛さを引き立てている。

「じゃあミクルちゃんのおごりで決まりね。」

「はうーやっぱりですか…」

ハルヒは容赦なく朝比奈さんに罰を与える。朝比奈さんだって決し

て遅刻をしたわけではないのだが、最後に来たという理由で罰を受けさせられる。これこそハルヒの理不尽な所の1つなのだ。

そう言う事で俺たちは朝比奈さんのおごりでそれぞれの飲みたい物を飲みながらハルヒの話しを聞いている。

「今日皆に集まってもらった訳はと言うと。昨日急に思いついたんだけど、今は夏休みでしょ？なのに私たちはこの長い休みを有効的に使えてないと思ったからよ。」

いきなりのハルヒの発言に戸惑ったのは俺だけではないだろう。

でも、言われてみれば夏休みになつてのこの一週間。何も大きなイベントや問題も起きていない、まあそれが普通なのだが。

「で？お前は何か有効的に使う方法でも思いついたのか？」

はあどうせハルヒのことだから「宇宙人をさがす」とか言い出すのであろうと思つたのだが、以外にもハルヒは普通の事を提案してきた。

「もちろん考えてきたわよ！旅行よ旅行！」

そうハルヒは夏休みに旅行がしたかったのだ。もちろん俺を初めとするほかの三人も反対は出来ないだろう。だが古泉は一人賛成みただ。

「旅行いいですね。僕も賛成ですよ」

長門も朝比奈さんも何も言わないが反対はしていない様だが、本当は反対したいのだろう。

と言うことで旅行に行くことに決定した。（しなくて良いのだが…）

その日の夜。俺は2日後になつた旅行の準備をしていた。

旅行の詳細はと言うと…場所は沖縄。2泊3日。以上なのだが、俺にはどうもハルヒが何か企んでいる様に思えてならない。

「キョンくん！旅行行くんでしょ？私も連れてって！」

いま喋っているのは妹だ。何故か妹は俺の事をキョンくんと呼ぶ。

「駄目だ。それに兄に向かってキョンくんは無いだろ？」

「ね、連れてつてくれてもいいじゃん！」

別に理由も無く連れて行きたくない訳じゃない。ハルヒが何をするのか分からない以上、妹を危険な目に逢わせる事は出来ないのだ。

「今度一緒に行こうな」

こんな時は駄々をこねる子の親の気持ちが分かるのは皮肉なもんだ。とこの後こんな言いあいがある10分近く続いたのだが、妹は一步も引かない様子だったので、仕方なくハルヒに連れて行ってもいいか聞いた。

「悪いな、妹が駄々こねるからさ」

「別に私は良いわよ」

そう言う事で、妹の粘り勝ちに終わった戦いだった。

旅行当日。駅に集合した俺たちは電車に乗り、空港へと向かったのだった。

この旅行が俺にとって忘れられない旅行になったと言う事は、言わずとも分かるであろう。

第2話「SOS団＋インザ・沖縄I」 (後書き)

この話の続きはまた次で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8916c/>

涼宮ハルヒの憂鬱...と言うか、これはもう俺の憂鬱で良いじゃねーか！

2010年10月10日00時20分発行